

現代日本語の到達事象 (achievement event) について

小西 正人

On achievement events in Modern Japanese

KONISHI Masato

Abstract: Since Vendler's classification of verb phrases into four types first appeared, many revised versions of his eventual semantics have been proposed by many researchers, but at present no theory about it has been accepted as the theory that properly analyzes linguistic data concerning aspectual meanings. One of the reasons for the lack of acceptance of these theories lies in their inability to capture the relation and the difference between the semiotic property of words (mainly, in this case, verbs) and their propositional property of eventual meanings, especially because these theories are generally indifferent to the semiotic property of words.

In this paper I propose a system of eventual semantics which consists of three components; 1) the core semiotico-lexical component, 2) the event-type semantic component, and 3) the aspectual component in chapter 2. Following this, I analyze achievement events in Modern Japanese with this system in chapter 3. After defining achievement events in 3.1, I mention the verbs which rarely represent achievement events (verbs for manner of motion, causative change, state, etc.) in 3.2.1: and those which almost do (verbs for arrival / departure, beginning / end, (dis)appearance, irreversible change, etc.) in 3.2.2. At the same time, I show that 1) this distributional preference stems from the core lexical meanings of verbs which represent the *semiotic* property of lexical items, and that 2) it is not the traditional eventual semantics but this three-componential semantics, which properly explains this preference because this system separates core lexical meanings of verbs (or verb constellations) from event-type meanings, using the property of distinctive opposition of verbs as (linguistic) signs.

0. はじめに

Vendlerの動詞句4分類以来、文意味の大きな一部分を担うものとして事象意味研究が盛んになっている。そのなかでも、影山(1996)やRothstein(2004)をはじめとする研究において、達成事象(accomplishment)にかんしては詳細な記述的・理論的研究が進んできたが、その他の事象についてはまだ十分に明らかになったとはいえない。これはひとつには、動作事象(activity event)のように、均質ではない成員からなるものが事象分類のなかに含まれていると同時に、事象意味を担う単位、および語彙項目としての動詞と事象意味との関係について一致した見解が得られていないということが理由として挙げられる。

本論文では現代日本語の到達事象(achievement event)について、事象理論をもとにした分析と

記述を行う。はじめに第1節で事象アスペクト的意味にかんする先行研究を簡単に見たあと、第2節で本論文が依拠する事象意味論を簡単に説明し、動詞と事象の関係について詳しくみる。そして続く第3節において、事象意味である到達事象と、中核意味を担う語彙項目である動詞との関係について細かくみる。まず3.1.で到達事象になりにくい動詞、続いて3.2.においてもっぱら到達事象をあらわす動詞をみたあと、それらの動詞の分布の意味的偏りについて、それぞれ「他の項目との示差的対立」という特徴をもつ「語彙項目（記号）としての動詞」という観点を中心にもつことによりはじめてこの関係を適切に記述することができるということを主張する。そして3.3.では到達事象に関係の深い要因について少しふれ、第4節で本論文のまとめを行う。

本論文の目的は、これまでほとんどふれられることのなかった事象と動詞の関係について、語彙項目（記号）としての動詞が関係する中核意味部門と、事態の形をあらわす事象意味部門、そして事態に対する視点をあらわすアスペクト部門という3部門からなる事象意味論を通じ、現代日本語の到達事象と動詞との関係について分析を行うとともに、理論の妥当性を検証するものである。

1. 先行研究

本節ではまず、これまで Aktionsart や内的／固有アスペクト的意味¹⁾ などと言われてきた事象意味について先行研究を概観し、問題点を述べる。

英語での研究については、前節で挙げた Vendler の動詞句4分類 (state, activity, accomplishment, achievement) を受け継いだ Dowty (1979) がある。Dowty は Vendler が提示した4分類を形式意味論の表記によって表示し、その内部構造と互いの関係を示した。また事象アスペクト的意味を包括的に扱った Smith (1997) では、それまでの動詞（句）分類によるアスペクト論を批判し、文の状況タイプをもたらすのは動詞ではなく動詞とその項 (verb constellation) であることを示した (Smith 1997: 17)。また Dowty の記述をさらに精緻化し達成事象 (accomplishment) の増分関係を示した Rothstein (2004) では再び動詞分類とアスペクト派生による各事象の関連づけが行われた。

日本語にかんする研究では、金田一 (1950) にて提示された動詞の4分類 (状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞) をはじめとして接尾辞「-テイル」をめぐる議論が続き、森山 (1988) の時定項分析や工藤 (1995) のパーフェクトの議論などを加えながら、用言接続形式との共起や意味などによる動詞分類という方法論を中心として研究が行われてきた。岩本 (2008) は、これらの研究を概観するとともに、Jackendoff (1983, 1990, 1991, 1996) の一連の概念意味論を発展させ、これまで未解決であった日本語の「-テイル」にかんする問題や段階的変化の問題などの理論的な解決をはかり、事象アスペクト論の基礎を完成させた。

しかしこれまでの研究で顕著なことは、動詞意味と事象意味が明確に区別されていないということである。もちろん動詞（句）だけで事象意味が決まるわけではないということは多くの研究が言及しているのであるが、語彙項目（記号）としての動詞がアスペクト的意味や事象意味とどのような関係をもつのかということについて明示的かつ説得的に述べた研究はなく、したがって動詞のもつ事象アスペクト的意味の論理的多義現象や、動詞のもつ意味と事象意味（構造）との関係について原理的に説明されることはほとんどなかった。

本論文では、語彙項目（記号）のもつ示差的な意味（価値）と、文や命題（そしてそれに資する語や句など）のあらわす真理条件的な意味とを区別し²⁾、動詞を中心とする中核意味部門＝語彙項目（記

号) 的側面と、事象を扱う事象意味部門＝文意味的側面との関係を通して、現代日本語の到達事象の記述と分析を行うとともに、到達事象と動詞との関係を原理的に説明する。

2. 事象意味論概要

本節では、本論文がとる事象意味論を簡単に説明する。

本論文では、以下の独立した3つの部門が、互いに緊密な関係をもちながら文のあらわす事象的・アスペクトの意味をあらわすと考え³⁾、その枠組みのもとに現代日本語の事象意味形式のひとつである到達事象について分析を行う。

その3つの部門は、中核意味部門・事象意味部門・アスペクト部門である。以下、順に説明する。

まず中核意味部門とは、言及事態 (situation, eventuality) の種類 (kind) と参与者について扱う部門である⁴⁾。この部門では、言及される事態について、それがどのような参与者をもつどのような種類の事態であるかという「名付け」を行う。したがって語彙の意味と最も緊密に関係する部門である。比較的近い類例として、Parsons (1990) が示した subatomic semantics のなかで取り上げられている表記 (とその考え方) をみてみよう。Parsons (1990: 97) は “Brutus stabbed Caesar with the knife” という文に対し以下の表記を行っている⁵⁾。

(1) $(\exists e)[\text{Stabbing}(e) \ \& \ \text{Agent}(e, \text{Brutus}) \ \& \ \text{Theme}(e, \text{Caesar}) \ \& \ \text{With}(e, \text{the knife})]$

これは「ある出来事 e があり、その出来事は Stabbing という出来事であり、その出来事の行為者は Brutus であり、その出来事の対象は Caesar であり、その出来事は the knife を用いてなされる」という意味をあらわしている。特に動詞との関連からいうと、ある出来事 (言及事態) e に対して「それは Stabbing という出来事である」と名付けるのがこの部門の特徴である。

次に事象意味部門について説明する。この部門は、言及事態の事象的意味、すなわち言及事態がどのような形 (構造) をもっているかということについて扱う部門である。ここでは Rothstein (2004) に挙げられている Accomplishment template を例にとって説明する。Rothstein (2004: 108) では達成事象 (accomplishments) がもつ基本的枠組みについて以下の表記を行っている。

(2) $\lambda y \lambda e. \exists e_1, e_2 [e =^S (e_1 \sqcup e_2)$
 $\wedge \text{ACTIVITY}_{\langle x \rangle} (e_1) \wedge \text{Ag}(e_1) = x \wedge \text{Th}(e_1) = y$
 $\wedge \text{BECOME}_{\langle y \rangle} (e_2) \wedge \text{Arg}(e_2) = \text{Th}(e_1)$
 $\wedge \text{INCR}(e_1, e_2, C(e_2))]$

関連する部分を述べると、達成事象 e は2つの下位事象 e_1 と e_2 からできていること、そのうち e_1 は行為者 x と対象 y をもつ動作事象 (ACTIVITY) であり、 e_2 は e_1 の対象項と同じ項を関連項としてもつ変化事象 (BECOME) であり、その二つの事象が増分関係にあることを示している。ここで特に中核意味部門との関連で重要なのは、この事象構造表記においては達成事象である e およびその下位事象である e_1 、 e_2 についてはどのような「名付け」もされていないということである。すなわちこの事象意味部門で扱うのはこうした事象のカタチであり、下位事象を含む事象の種類 (たとえば

Stabbing などのような) の名付けではないということである。

しかし事象の種類とカタチとは互いに独立しているとはいえ密接に関連するものであり、従来の研究ではこの部分が見過ごされてきていた。このことについては本節後半、および第3節の到達事象分析において詳しく述べる。

そして最後がアスペクト部門である。この部門は従来「文法的アスペクト」として語彙的アスペクトに対立して言及されてきた意味である。ここでは言及事態に対する視点、あるいは言及事態参照部分についての意味が示される。類例として、「動作 (Activity)」や「到達 (Achievement)」など主動詞と項であらわされる状況アスペクト (situation aspect) と区別して、文法的形態素がもたらすアスペクト的意味である「完了 (Perfective)」 「未完了 (Imperfective)」 などの視点アスペクト (viewpoint aspect) を設定した Smith (1997) の示すものをみてみよう。例は未完了の一般的時間スキーマ (General imperfective temporal schema) である (Smith 1997: 73)。

(3) I . // // // . . F

これは、未完了視点は事象開始点 I と事象終了点 F の間の斜線部分を取り出して述べる視点であるということを示している。すなわち特定のカタチ (構造) をもった言及事象のどの部分を取り出して述べるかというのが視点アスペクトであり、これまで述べた2つの部門とは密接に関係しながらも、やはり独立に設定されるものである (さらに詳細については Comrie 1976 も参照)。

ここで具体的に、これらの3部門の役割をみてみよう。たとえばある事態が「建築家が自分の家を建てている」と表現されるとき、中核意味部門では「その事態は『建てる』という特徴をもつ事態であり、動作主は『建築家』、対象は『自分の家』である」と認められる。そして事象意味部門では「その事態は『達成事象 (accomplishment event)』である」と認められ、アスペクト部門では「その事態に対する視点は『未完了 (imperfective)』である」と認められる。

また反対に、ある事態について中核意味部門において「その事態は『座る』という特徴をもつ事態であり、動作主 (主体) は『一郎』である」と認められ、事象意味部門において「その事態は『維持的動作事象⁶⁾』である」と認められ、アスペクト部門において「その事態に対する視点は『未完了』である」と認められる時、その事態は「一郎が座っている」と表現される。その事態が『座る』という事態であると判断された (名付けられた) 理由は、動作主の外見、姿勢、動き、周りの状況など、さまざまな要因による。

この3部門事象意味論の特徴は、語彙的意味を扱う中核意味部門と、事象構造を扱う事象意味部門を明確に区別した点である。これにより中核意味部門において、動詞をはじめとする語彙項目の記号的特徴、すなわち他の語彙項目との示差的対立によってその意味 (価値) が決まるという特徴を意味論に組み込むと同時に、語彙項目である動詞 (あるいは動詞を中心とする事象指示表現) の意味 (価値) による事象の選好を原理的に説明することが可能となる⁷⁾。これについては、第3節において具体的に示す。

本論文で分析の対象となる到達事象は、事態の構造を指定する事象意味部門に属するものである。次の第3節において、現代日本語における到達事象と中核意味部門 (おもに動詞) との関連をみながら、従来の事象アスペクト意味論が残した問題点を解決する。

3. 到達事象 (achievement event) について

本節では現代日本語の到達事象について述べる。はじめに 3.1. において本論文で扱う到達事象の定義を確認したのち、3.2. において到達事象と動詞との関係について、具体的には到達事象をあらわしにくい動詞 (3.2.1.)、もっぱら到達事象をあらわす動詞 (3.2.2.) について述べ、最後に到達事象をあらわすその他の場合 (3.3.) について述べる。

3. 1. 先行研究および本論文で扱う到達事象

Vendler の動詞句分類を考える場合、日本語でそれに相当するのは金田一 (1950) の瞬間動詞 (その後修正を経た「結果瞬間動詞」) が中心となるが、ここでは時定項に基づき詳細な動詞分類を行った森山 (1988) をみることにする。森山 (1988) の時定項分析によれば、瞬間的な出来事をあらわすものとしては、一点的な変化をあらわす s (主体の一点的变化) および o (客体の一点的变化) に分類される動詞句が中心となる。森山 (1988) で挙げられている動詞は、以下のとおりである。

- (4) s 動詞句: 飽きる、(野菜が) いたむ、うせる、生れる、枯れる、消える、結婚する、(完全に) 壊れる、焦げる、死ぬ、(大学に) 滑る、成立する、(行事が) 流れる、(柿が) なる、(橋が) できる、(道が) つく、滅びさる、離婚する、割れる
- (5) o 動詞句: 枯らす、(うっかり) 焦がす、設立する、無くす、消す、設ける

本論文では Dowty (1979: 124) が到達事象に対して与えた $BECOME[\pi_n(\alpha_1, \dots, \alpha_n)]$ という表記を参考に、到達事象を「一時点的状態変化事象」とする⁸⁾。それゆえ、森山 (1988) の時定項分析において同じ s や o を含むものであっても、変化後の維持や結果持続を含む動詞句⁹⁾ は到達事象ではなく¹⁰⁾、変化的な過程 (進展) をあらわすもの¹¹⁾ も到達事象ではない。また同じく一時点的であるが変化をあらわさない z 動詞句¹²⁾ も到達事象ではなく、こちらは運動事象¹³⁾ が限界的である「叩く」などと同じ semelfactive event であると考えられる。

次の 3.2. では、ここで定義した到達事象と関連の深い動詞や項を示し、動詞分類と事象分類との関連と差異について述べる。

3. 2. 到達事象と動詞

ここでは到達事象と動詞の関係について述べる。3.2.1. では到達事象をあらわしにくい動詞、3.2.2. ではもっぱら到達事象をあらわす動詞について、比較的詳細に具体例を挙げるとともに、その理由について分析を行う。

3. 2. 1. 到達事象をあらわしにくい動詞

まず到達事象は定義上、状態変化事象でなければならない。

状態変化事象には大きく分けて次の 3 種類がある。ひとつは 3.1. でも述べた進展的变化事象である。この事象は非限界 (atelic) 事象であり、それゆえ動作事象 (activity event) のひとつである¹⁴⁾。いまひとつは Vendler の分類でも示されている達成事象 (accomplishment event) である。到達事象との違いは、Dowty (1979) や影山 (1996) が示すとおり、達成事象は状態 (変化) 事象をひき起こす運

動事象との複合事象であり、この運動事象がもつ継続的性質のため、事象全体としては一時点的とならない。そして最後が、ここで扱う到達事象である¹⁵⁾。

このような到達事象のもつ「一時点的」「状態変化」という性質のため、到達事象をあらわすことが難しい動詞としては以下のようなものが挙げられる。

まず状態変化事象をあらわさず、もっぱら運動事象をあらわす動詞である。これらの動詞は一般的には動作動詞 (activity verb) とよばれ、「走る」「泳ぐ」などの非能格自動詞や、「見る」「運転する」などの非結果他動詞に多くみられる。これらの動詞は、おもに運動の特定の様態により他の運動動詞と対立するため、たとえば着点をあらわす共起表現や文脈などによって状態変化事象をあらわす場合でも、一時点的事象である到達事象をあらわすことはほとんどない。

状態変化事象を備えていても、達成事象をあらわしやすい動詞もまた到達事象をあらわしにくい動詞のひとつである。達成事象と到達事象の違いは、先にも述べたとおり達成事象は状態変化をひき起こす運動事象をもち、それが状態変化事象と増分関係 (incremental relation) をもつという点である。それゆえ運動事象の運動様態を (ある程度) 特定して他の動詞との差別化をはかる動詞は、たとえば状態変化事象と結びついていても到達事象になることは難しい。具体例としては、たとえば結果をもたらす働きかけ (動作) の過程の様子を詳しく叙述する動詞として早津 (1989) が挙げる「研ぐ」「薙ぐ」などのような動詞である。

また、状態事象を備えていても、それが変化を伴わない単なる状態 (state) である場合も到達事象とはならない。それゆえ「ある」「いる」などの状態動詞や「読める」などの可能形述語などは到達事象となることはない。

「どンドン」「少しずつ」などの漸次的変化修飾表現と共起して進展的变化事象をあらわすことの多い「太る」「増える」などの動詞もまた、同じように考えれば到達事象をあらわすことが難しいはずであるが、実際はそのようなことはない。これは、ひとつには着点である状態を特定する表現 (「60個に (増える)」など) が共起することにより容易に一点的变化事象=到達事象を叙述することができること、そして多くの場合、出来事は一時点に収束されることが可能であること (「昨日6時にご飯を食べた」¹⁶⁾) などの理由によると考えられる。

それでは次の3.2.2.で、もっぱら到達事象をあらわす動詞についてみることにする。

3.2.2. もっぱら到達事象をあらわす動詞

ここではもっぱら到達事象をあらわす動詞¹⁷⁾について、具体例を挙げるとともに意味的な分類を行い、分布がそれらの意味に偏っている理由について考察する。そしてこれら動詞がもっぱら到達事象をあらわすのは、語彙論的なレベルにおける他の語彙項目との「示差的対立」という記号論的性質からくるものであるということを示す。

はじめに Dowty (1979) が到達事象の意味的下位類の例として挙げたものを基に、到達事象との関わりについてそれぞれみていく。Dowty (1979: 68) が挙げるのは以下の下位類である¹⁸⁾。

(6) ACHIEVEMENTS¹⁹⁾

A. Locatives: reach, leave, touch, arrive at, land on, depart from, fall from

B. Change of Physical State (Absolute state): melt, freeze, die, be born, molt, ignite, explode,

- collapse, turn into, turn to, become
- C. Change of Physical State (Degree state): darken, warm, cool, sink, improve, become ADJ-er
- D. “Aspectual” Complement Verbs: begin, start, cease, stop, resume, end
- E. Possessive: acquire, receive, get, lose
- F. Cognitive: notice, spot, see, catch sight of, hear, taste, smell, feel, lose sight of, realize, recognize, understand, detect, find, remember, forget
- G. Change of State of Consciousness: awaken, fall asleep

到達事象を構成する状態変化事象が一時点的であるということは、岩本（2008）で設定されている [-dense] という素性をもつ状態変化（非稠密的限界事象）であることを示している。裏を返せば、共起表現や文脈にもかかわらず [+dense] 素性をもつ稠密事象を叙述することが難しい動詞が、ここで扱うもっぱら到達事象をあらわす動詞ということになる。

Dowty (1979) の項目 A. で挙げられている動詞は、先行研究において到達動詞の代表として挙げられる「着く」「到着する」などの到着／出発に関係する動詞である。これらの動詞は「(ある場所に) いない状態」から「いる状態」への（あるいはその反対の）二値的变化を移動によって実現するという事象を叙述する²⁰⁾。「(ある場所に) いない状態」と「いる状態」は二値的であり、「深まる」「赤らむ」などの形容詞派生動詞のように段階的に変化する状態ではない。また「食べる」などの消費動詞のように増分主題 (incremental theme) をもつものでなく、対象は一括した全体として扱われる²¹⁾ ため、やはり稠密事象として解釈されることは難しい。

ここで、到着／出発をあらわす動詞を、他の状態変化動詞と比較してみよう。たとえば森山（1988）が se 動詞句（持続可能な結果をとまなう主体変化）として分類している動詞例は次のとおりである（森山 1988: 156）。

(7) se 動詞句—結果持続のみある変化動詞句—²²⁾

諦める、合わさる、遅れる、覚える（覚えようとする動作をも含まない場合）、（役を）降りる、（病気に）かかる、乾く、転ぶ、（花が）咲く、締まる、就任する、（気持ちを）捨てる、倒れる、溶ける、届く、間違う、忘れる、（一つのことが）わかる

これらの動詞は、状態変化は一時点的であるものが多いが、「しばらく」などの単純期間成分との共起などによりその（結果）状態持続についても叙述することのできる動詞である。これらの動詞と、先にみた到着／出発動詞との違いについて、語彙項目の示差的性質という視点から考える。

まず到着／出発動詞であるが、これらの動詞は上述のとおり「(ある場所に) いない状態」から「いる状態」への（あるいはその反対の）二値的状态変化を移動により実現するという事象を叙述することを本分とする²³⁾。すなわち対象の特定の場所での存在⇔非在という状態変化そのものをあらわすために用いられる動詞である。それに対して状態変化事象だけでなく状態持続事象についても同じ形式で叙述することのできる(7)のような動詞は、その多くが存在の様態、すなわち「どのように存在しているか」という特定の状態を叙述することにより他の動詞と対立する動詞である。そのため「その（特定の）状態が持続している」という動作事象 (activity event) を叙述するときにも、他の動詞と競合するこ

となく特定の状態をあらわす論理的多義 (logical polysemy) をもつ動詞となることができるのである²⁴⁾。

また到着／出発動詞と同じようにその存在⇔非在という状態変化を叙述する動詞として「生まれる」「なくなる」「滅びる」などの発生／消滅をあらわす動詞がある。そしてこれらの発生／消滅動詞もまた、もっぱら到達事象をあらわす動詞である。

次の例を見てみよう。

- (8) a. 電気が消える。
- b. 黒板の字が消える。

(8a) は「消灯」という特定の状態をあらわす動詞であり、したがって「しばらく電気が消えた」というように単純期間成分と共に状態持続を叙述することができるのに対し、(8b) は対象の非在化という状態変化をあらわす動詞として用いられているため、状態持続をあらわす動作事象をあらわすことはできない。(ただし「あらわれる」「消える」などの出現／消失動詞は「生まれる」などの発生／消滅動詞と異なり段階的変化や増分主題をとることができるため、「もっぱら」到達事象をあらわすとまではいかない。)

また Dowty が項目 F. に挙げる「知覚動詞」であるが、日本語ではおもに状態事象をあらわす「見える」「聞こえる」、おもに動作事象をあらわす「見る」「聞く」などの動詞を除くと、「気付く」「悟る」²⁵⁾などの「気付き」動詞がもっぱら到達事象をあらわす動詞として残される。これらの「気付き」動詞もまた、心的にある物が対象として存在するようになるという状態変化をあらわすと考えられるため、発生動詞と並行して考えることができる²⁶⁾。

対象を一括して扱うという性質、および段階的変化を認めないという性質をもつ点では、E. の所有にかんする動詞句（「得る」「手に入る」など）も比較的到達事象をあらわしやすい動詞である²⁷⁾。ただし「所有していない状態」から「所有している状態」への状態変化そのものをあらわすのではなく「所有している状態」を特定状態として他の動詞と弁別して用いられる場合は、(7) の状態変化動詞同様、状態持続もしくは状態維持的側面を叙述することのできる論理的多義動詞となる（「2年間信頼を得た」など）²⁸⁾。

また Dowty が D. として挙げる開始／終了動詞もまた特定の事態の時間的境界（開始点／終了点）を越えること、すなわち一時点的状態変化をその本分としてあらわす動詞であり、もっぱら到達事象をあらわす動詞である。

語用論的条件が比較的大きく関係するものとしては、動詞によって叙述される特定の状態が「不可逆」なものである場合、それが不可逆であればあるほど到達事象をあらわすことが多くなる。

- (9) a. ペットが死ぬ。
- b. 窓ガラスが割れる。
- c. 機械がこわれる。
- d. 時計がとまる。
- e. 電車がとまる。

(9a) から (9e) にかけて状態変化の不可逆性が弱くなっているが、それにつれて到達事象以外の事象解釈も可能になっている（たとえば「しばらくの間」などの単純期間表現との共起が可能となる）。不可逆性と到達事象とのあいだには、動詞で叙述される特定の状態（変化）が不可逆であればあるほど、その状態を持続したり維持したりするという出来事そのものや、その出来事の期間について非限界動作事象として叙述する必要はなくなるという関連性がある。したがって不可逆である状態変化事象を叙述する動詞であればあるほど、もっぱら到達事象をあらわす動詞となるのである。

3. 3. 到達事象をあらわすその他の場合

ここでは到達事象をあらわす動詞以外の要因について少し考えてみる。

まず先行研究でしばしば挙げられるのは「過失による状態変化」である。「窓ガラスを割る」という文は「一テイル」を付加することにより「窓ガラスを割っている」という動作進行の意味をあらわすことができるのに対し、過失をあらわす副詞「うっかり」をともなう「うっかり窓ガラスを割る」という文では、「一テイル」付加（「うっかり窓ガラスを割っている」）によってあらわされるのは動作進行ではなく動作パーフェクトの意味である。これは「うっかり窓ガラスを割る」という文であらわされる事象が、非限界動作事象や限界達成事象ではなく限界到達事象であることを示している。

過失による状態変化がもっぱら到達事象をあらわすのは、語用論的要因と語彙論的要因の二つによるものである。まず語用論的要因として挙げられるのが、過失による状態変化であるためそれは往々にして「一時点的」である、ということである。過失の多くは手を滑らせて花瓶を割ったりするような「一時点的な不注意」が原因となって起こる状態変化であり、（望ましくない）状態変化が続いて起きているにもかかわらず原因となる事態を続けることはあまりない²⁹⁾。

語彙論的要因とここで述べるのは、以下のような場合である。たとえばある人物が何か固いものを叩いて割った場合を考えてみよう。それが意図的に行われた場合は、運動事象と状態変化事象をまとめて「小西がヤシの実を割った」というひとつの達成事象として叙述することができ、また「小西がヤシの実を割っている」という文で下位事象のひとつである運動事象の進行をあらわすことができる。それに対してそれが意図的ではなく、叩いているうちに誤って割れてしまった場合、「小西がヤシの実を割った」という文は状態変化事象を中心に構成される到達事象をあらわすと解釈される³⁰⁾のが自然であり、「小西がヤシの実を割っている」という文は運動事象の進行をあらわすことは難しい。それは、ひとつには過失である場合、叩くことがすなわち割ることに必然的につながるわけではないので、叩いている段階で「割る」という動詞で事態を叙述するのが不適切であること、さらにもうひとつの理由としては、仮に割ってしまうことが明らかである場合、たとえば叩き続けて割ってしまった事態をビデオに録画して、そのビデオを見ながら述べる場合でも、運動事象が進行していることを述べる時には「小西がヤシの実を（誤って）割っている」というよりは「小西がヤシの実を叩いている」というように「叩く」という動詞を使ってその事態を動作事象（正確には semelfactive 事象の反復）として叙述するのが自然である。

この二つの要因により、過失による状態変化事象はもっぱら到達事象として叙述されるのである。

到達事象をあらわす動詞以外のもうひとつの要因について、ここでは動詞の場合と同じく事象の開始をあらわす場合を挙げておきたい。事象の開始については、「はじめる」などの開始動詞（主動詞・

補助動詞) によってもあらわされるが、時点表現などにより事象の開始局面を取り出すこともできる。

(10) a. 今日は6時半に夕食を食べる。

b. もうすぐ走る。

これらの場合もまた開始動詞を用いた場合と同様、境界を越えて事象が開始されることをあらわす始動表現であるため、到達事象をあらわすこととなる。

このほか、これまでに少しふれたが、填充性 (extension) をもたないため増分主題になれない対象や、変件事象文と共起する一時点的表現など、到達事象と相性のよい共起表現があるが、本論文では深く考察することはしない³¹⁾。

4. まとめ

本論文では、第1節において従来のアスペクト研究を概観し、動詞と事象意味との関係について、とりわけ日本語においては明示的かつ説得的に示す研究がないことを指摘し、動詞を中心とする中核意味部門=語彙項目(記号)的側面と、事象を扱う事象意味部門=文意味的側面との関係に基づく事象の分析が必要であることを述べ、続く第2節では中核意味部門・事象意味部門・アスペクト部門という3つの下位部門をもつ事象意味論を提示した。

到達事象を扱った第3節では、3.1.において到達事象を「一時点的状態変件事象」と定義し、3.2.において「到達事象をあらわしにくい動詞」「もっぱら到達事象をあらわす動詞」のそれぞれを見た。そして運動様態動詞や状態変化他動詞、および特定の状態をあらわす状態変化自動詞が到達事象以外の事象をあらわしやすいのに対し、到着や発生などの事態を叙述する動詞がもっぱら到達事象をあらわすことを示したのち、このような意味的偏りは、前者は運動の様態や対象の状態の特定性において他の語彙項目(動詞)と対立するため、運動事象をもつ動作事象や達成事象、あるいは状態持続動作事象をあらわすために用いることができるが、後者は存在⇔非在という一種類の状態変化をあらわす動詞であるため、一時点的状態変化以外の文脈で他の動詞と対立して用いられることは非常に難しいという事情によることを示した。あわせてこの分析は語彙論的(記号的)特徴である「示差的対立」を事象意味論に取り込むことによりはじめて可能となることを主張した。

注

- 1) Comrie (1976) では inherent meaning という用語で言及されている。
- 2) 記号と語の機能については Benveniste (1967) に詳細な議論がある。
- 3) もちろんこれ以外にも態・時制・モダリティなどがかわってくるが、ここでは取り上げない。またアスペクト部門についても今回は取り上げず、事象意味部門(と中核意味部門)に焦点を絞る。
- 4) ただしすべての動詞について以下で示すように参与者の数・役割が指定されている、というわけではないようである。本論文では参与者の意味役割の指定については考察の対象外とする。

- 5) ここでは時制などの意味は表示されていない。
- 6) 維持的動作事象については小西 (2008) 参照。
- 7) いわゆる「アスペクト強制」において動詞のもつ (あるいはデフォルトで与えられる) 事象アスペクト的意味と、時間表現などにより与えられる事象アスペクト的意味が異なっていた場合、ほとんどの場合が動詞ではなく時間表現のもつ事象アスペクト的意味に「強制」されるのはこのためである。すなわち時間表現は固有の事象アスペクト的意味をあらわすものとして他の時間表現と対立するのに対し、動詞は事象アスペクト的意味よりはむしろ参与者を含む事態の種類において他の動詞と対立するため、特定の事態の「名付け」をする時には事象アスペクト的意味はほとんどの動詞において第一義として前面に出てくることはないのである。
- 8) 岩本 (2008) では一時点的変化事象は [-dense] とされている。
- 9) 具体的には sd・od・se・oe、およびそれが含まれる動詞句をさす。
- 10) 詳細については小西 (2008) 参照。
- 11) 具体的には asb・aob、およびそれが含まれる動詞句をさす。
- 12) 森山 (1988) では「見かける、目撃する、ひらめく、一瞥する、驚く、命中する、あきれる、飲み込む、(ぼかんという音が) 聞こえる」などの例が挙げられている。
- 13) 影山 (1996) でいう上位事象。Jackendoff (1990) や岩本 (2008) では AFF が関係するものとして表記されている。
- 14) 詳細については小西 (2008) 参照。
- 15) たとえば岩本 (2008) のように状態変化事象をデフォルトで一時点的と考えるか、あるいは稠密性 (density) (状態変化の場合、ある状態を着点とする変化 (TO) であるのか、それともある方向への変化 (TOWARD) であるのかという着点/方向の対立) にかんしては未指定 (underdetermined) であると考えるかという問題については決定的な議論があるわけではない。しかし上でも述べたような語彙項目の記号的性質という点から考えると、デフォルトで一時点的の性質をもつと考えるための積極的な根拠はないように思う。
- 16) 始動的意味 (「6 時に食べはじめた」という意味) ではない場合。
- 17) ただし複数事象や一般事象などにおいてはその限りでない。
- 18) Dowty (1979) では統語的分類も行われているが、ここでは一括した。
- 19) C. にかんしては一時点的な事象ではないため、本論文での到達事象には含まれない。また B. の一部の動詞 (ignite, explode など) については非能格自動詞であり、semelfactive 事象をあらわすと考えられるためここでは考察対象から除外する。
- 20) ただし「上陸する」「着陸する」などのように着点場所を特定する意味であれば付帯してもよいようである。
- 21) 消費動詞のように増分主題をもつ変化事象の場合、変化事象全体は [+dense] となる (岩本 2008)。
- 22) ただし「(役を) 降りる」「届く」など、物理的事象をあらわす場合は通常結果持続をあらわすことはできないと思われる動詞も含まれている。
- 23) 「本分とする」という表現はあまり正確ではないが、「その意味をあらわさなければ、その事態はその動詞で叙述されることはない」という必須条件に近い意味のことである。もちろん語彙項目の意味 (価値) は他の語彙項目との関係によって決まるため、これを必須条件そのものとして考えることはできない。それにもかかわらず「必須条件に近い」意味について述べることはできるのは、言語がとりもなおさず社会的であることによる。このあたりの事情については、Quine の言語論について述べた丹治 (1996) を参照。

- 24) これは(7)の主体変化動詞に限らず、客体変化動詞や維持事象をあらわす動詞にも共通してあてはまる特徴である。Dowty が挙げる B. の動詞のいくつかも同じように扱うことができる。
- 25) 認識的な気付きをあらわす動詞「見つける」をこのリストに加えてもよいかもしれない。
- 26) 発生とは反対の「消滅動詞」と並行するものとしては「忘れる」などの動詞が考えられるが、段階的状態変化事象や増分主題状態変化事象をあらわすことができるため、どちらかといえば「消える」などの消失動詞に近いと思われる。
- 27) ただし対象が抽象的になればなるほど段階的変化が可能になり、到達事象以外の事象をあらわしやすくなる。
- 28) 同様に「ある」ことが特徴的であるととらえられる場合は、存在様態を特定しない動詞であっても継続の意味になりうる。
- 29) そのため過失であっても、たとえば本人が気付かないなどの理由で状態変化開始後も原因となる事態が続けられている場合は、到達事象にはならないこともある。「田中君、君、ほら、ガラス割ってるよ！」
- 30) この場合も「割る」という状態変化他動詞を用いているが、このとき運動事象がどのような形をとるのかは不明である。岩本（2008）では、動作主性の欠如した動作事象は時間投射をもたない（岩本 2008: 253）として事象投射から排除するという説明を行っている。あるいは寺村（1982）の間接受身のような関係（すなわち状態変化事象から「動作主」あるいは運動事象へ影響を与えるという方向性をもつ）で二つの下位事象が関係しているのかもしれない。ここではこれ以上この問題は扱わないことにする。
- 31) 小西（2003: Ch.3.3.）に詳しい記述がある。

参考文献

- 岩本遠億編著 2008 『事象アスペクト論』 開拓社。
- 影山太郎 1996 『動詞意味論 一言語と認知の接点』 くろしお出版。
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15。（再録：金田一春彦編 1976 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房、5-26。）
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト ー現代日本語の時間の表現ー』 ひつじ書房。
- 小西正人 2003 『具体的発話への動詞の寄与 ー特にアスペクト的意味についてー』 博士論文。
- 小西正人 2008 「現代日本語の動作事象 (activity events) について」 『日本言語学会第 136 回大会予稿集』 98-103。
- 丹治信春 1996 『言語と認識のダイナミズム』 勁草書房。
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版。
- 早津恵美子 1989 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて ー意味的な特徴を中心にー」 『言語研究』 95: 231-56。
- 森山卓郎 1988 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院。
- Benveniste, Émile. 1967. “La forme et le sens dans le langage,” *Le Langage II*, 29-40. Reprinted in: 1974. *Problèmes de linguistique générale 2*, Gallimard, 215-38.

- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. New York: Cambridge University Press.
- Dowty, David R. 1979. *Word meaning and Montague grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and cognition*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic structures*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1991. "Parts and Boundaries," Beth Levin and Steven Pinker eds., *Lexical and Conceptual Semantics*, Cambridge, MA: Blackwell, 9-45.
- Jackendoff, Ray. 1996. "The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English," *Natural Language & Linguistic Theory*, 14: 305-54.
- Parsons, Terence. 1990. *Events in the semantics of English: a study in subatomic semantics*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Rothstein, Susan. 2004. *Structuring events: a study in the semantics of lexical aspect*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Smith, Carlota S. 1997. *The parameter of aspect (second edition)*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.